

江戸時代における光琳像^{イメージ}の変遷について(下—八)—文政以後(一)—

安田 篤生 美術教育講座(美術史)

承 前

尾形光琳(一六五八—一七一六)について語る場合、現在では「琳派」の絵師として取り上げるのが定着している。しかし、光琳在世当時、「琳派」という流派が存在していた訳ではない。「琳派(尾形流)」を代表する絵師として光琳を位置づけたのは酒井抱一(一七六一—一八二八)が初めてで、光琳が没しておよそ百年後のことである。文化十年(一八一三)冬に『緒方流略印譜(一枚摺)』を版行した抱一は、光琳百年忌にあたる同十二年六月に改訂版にあたる『尾形流略印譜』一冊を上梓したのである。しかし、抱一以前から諸書において光琳について言及されており、前稿まで²⁷⁰抱一の著作も含めた江戸時代の文献を通して窺える光琳に対する認識、すなわち江戸時代における光琳像(イメージ)の変遷についてたどってきた。

特に前稿では、『尾形流略印譜』諸本について検討を続けて一定の結論を示すとともに、文化十二年に略印譜が上梓されて以降に示された光琳像について考察を始めた。本稿で検討を続けることとしたい。

一一、『尾形流略印譜』(文化十二年版)以降(続)

(三) 小型書画人名辞典

前稿では文化十四年に出版された『光琳漫画』と翌十五年に刊行された『本朝古今書画便覧』について検討を加えた。続く文政年間(一八一八—三〇)から幕末にかけて、『新撰和漢書画一覽』が版を重ね、増補されたが、同じ横小本の書画人名辞典が複数出版されており、ここでまとめて見ていくことにしたい。

まず、文政二年(一八一八)五月に江戸(東都)の書肆・聚文堂から『増補和漢書画一覽』一冊が刊行された。²⁷¹同書は凡例に「文政二年己卯孟夏 東都 聚文堂主人誌」とあることから、出版書肆により編集されたものと考えられる。その内容は、書名に『増補和漢書画一覽』とあり、凡例の最初にも「此書前二収録シ

テ雅客ノ机上ニ備ハレリ然レトモ洩ルヽモノ亦多シ悉ク補ハンニハ姓氏履歴未タ詳ナラサルモノアレハ姑闕之少クコレヲ補ヒテ今上木ス」と記されているように、天明六年(一七八六)版『新撰和漢書画一覽』に準拠している。また、同書は第一〇丁裏から第二二丁裏を畫家部にあてて、一部を除いて『新撰和漢書画一覽』第一一丁裏から第二三丁裏と一致している。従って、光琳の項に關しても、「尾形氏名ハ寂明青々堂。長江軒ノ号アリ。京師ノ人。画ヲ狩野安信ニ学テ一家ヲナス。又漆器ヲ作、描金ヲヨクス。兼テ茶事ヲ好ミ、假山水ヲ作ル。スベテ其為所天機ニ觸發シテ、舊套ヲ脱シテ益奇也。」(19才)というその記述は『新撰和漢書画一覽』と一致する。しかし、『新撰和漢書画一覽』に収録されている人の伝記を全て同書から引用しているわけではない。雑部に載る乾山(深省)の場合、「名ハ深省通名新三郎初京都ニ住シ後双岡ニ住ス号尚古又習静堂紫翠靈海陶隱等ノ号アリ晚年江戸ニ住ス好テ陶器ヲ製ス花樣ヲ画キ讃詞ヲ加フ底面乾山ノ兩字アリ又日本雍州乾山陶器省造之文字ヲ記ス世ニ乾山焼ト称ス」(43ウ)という記載は、文化十五年に刊行された『本朝古今書画便覧』と一致している。

次に、文政五年に『続新撰和漢書画一覽』一冊が上梓された。²⁷²凡例の末尾に「文政四年辛巳夏五 文隆園主人誌」とあるが、表紙裏の見返しにも書名に添えて「文隆園藏」とあることから、刊行の前年五月に初版を上梓した書肆により凡例が記されたと考えられる。²⁷³天明六年版『新撰和漢書画一覽』を踏まえて書かれた凡例に、「新撰ノ二字ヲ冠シ新ニ上木ストイヘドモ、古今諸家ノ履歴得テ詳カラズ、或其地方ニタフトメトモ、他邦ニ聞エズシテ、遺脱スルモノ亦少カラズ、今南陔山人ニ託シテ索搜シ、前編ノ闕タルヲ補ヒ、新ナルヲ撰ミ出シテ、續ノ字ヲ挑ケテ、更ニ割剗氏ニ附ス」とある。つまり、同書に叙(序)を寄せている南陔野叟(山人)に委嘱して『新撰和漢書画一覽』から漏れた人や伝記を補うために出版されたのが本書であるというのである。²⁷⁴第九丁表から第一九丁表にかけての畫家部を見ると、『新撰和漢書画一覽』にも項目が立てられているのは十数人にとどまる。ここに光琳や乾山、始興などの名を見ることはできないのも、凡例に掲げられた編集方針によるものであろう。本稿に關わる絵師では、宗達だけが収録されてお

り、「喜多川氏。通名俵屋宗達。京師ノ人。泉州堺ニ住ス。一家ノ画」（11才）と記されている。宗達は『新撰和漢書画一覽』にも立項されているが、この記載は『本朝古今書画便覧』に続けて二人の宗達が立項されている内二人目と一致し、同書により補ったものと考えられる。

続いて、天保六年（一八三五）に華木館から出版されたのが『新增和漢書画集覽』一冊である。刊行に先立って天保三年春に古筆了意によつて記された序には、「世に書畫一覽と題せる書多しされとも古に撰へるは今に宜しからず今輯たるは古に疎也この書は新古を盡し且折衷の体裁を得たれば常に座右に展して探索せば書画に於て益ある事すくなからしと云爾」とある。先行書から内容を一新したのも受け取れるが、実態は天明六年版『新撰和漢書画一覽』を増補したものである。²⁷第一〇丁裏から第二四丁裏にかけての畫家部を見ても、『新撰和漢書画一覽』に収録されている絵師の項目はそのまま踏襲しており、第一九丁表から裏にかけて続けて掲載されている宗達、光琳、乾山、始興についても記載内容や形式は『新撰和漢書画一覽』と同一である。一方、天明六年版の空白欄等に増補された項目の中にも宗達の項があり、「喜多川氏。通名俵屋宗達。京師ノ人。泉州堺ニ住ス。一家ノ画」（16ウ）と記されている。先述した『続新撰和漢書画一覽』の宗達の項の記載と一致することは明らかだが、当然のことながら同書が依拠した『本朝古今書画便覧』とも一致しており、どちらの書によつたのかは不明である。

また、文溪堂・丁子屋平兵衛を中心とした江戸（東都）の書肆十二軒と大坂の書肆三軒から出版された『廣求大成和漢書画集覽』一冊には弘化元年（一八四四）に海西鶴峯（彦一郎）によつて記された序が備わっている。²⁸凡例は廣覺道人によつて記されているが、海西鶴峯や廣覺道人については不明である。本文第九丁表から第一八丁表にかけての画家部には絵師が五〇音順に配列されており、光琳に加えて宗達と始興について次のように記されている。

宗達（名伊年法橋能州人京住画法一家世称宗達流其族有万年宗達其子孫世々仕加州通称宗達万年之後季少年郭大年並能画）（13才）

渡辺始興（称求馬京人学狩野成一家）（16ウ）

尾形光琳（名叔明有青々堂長江軒等号京師人学狩野安信成一家）（16ウ）

光琳についての記載を、前述した『増補和漢書画一覽』や『新撰和漢書画一覽』

と比較してみると、「寂明」とすべき所を「叔明」と誤つてはいるが、『新撰和漢書画一覽』の前半部分と一致することは明らかである。宗達についても同様で、「名ハ伊年法橋位京師ノ人画法一家ヲナシ、花卉禽虫ヲ作。世ニ宗達流ト称ス、又万年宗達ト称スルモノ、伊年ノ族ナリ。其子孫加州ニ住事、世々宗達ヲ通称トス。各其号ヲ異ニス。万年ノ後季少年又郭大年ト称スルモノ並ニ画ヲヨクス。然トモ伊年万年ニ不及コト遠シ。」という『新撰和漢書画一覽』の記載を簡略にしている。始興の記載も、「渡邊氏求馬ト称ス。画ヲ狩野家ニ学テ。後一家ヲナス。尤光琳ノ風ヲ慕フ。京師ノ人」という『新撰和漢書画一覽』の記載から「尤光琳ノ風ヲ慕フ。」という部分を削除しているにすぎない。

ここまで検討を重ねてきたように、光琳や乾山、宗達、始興などに関する横小本の書画人名辞典の記載内容は、天明六年版『新撰和漢書画一覽』の記載を受け継いでおり、増補する場合は文化十五年に刊行された『本朝古今書画便覧』によつて補われていた。一連の小型書画人名辞典の最後に、『書画医家』鑑定便覧』とその改題再編本とも言うべき『万寶書画全書』について見ておきたい。

『書画医家』鑑定便覧』（『古今墨蹟鑑定便覧』画書家医家之部、以下『鑒定便覧』と略す）三冊は、安政二年（一八五五）に勝村治右衛門など京都（皇都）の五書肆、須原屋茂兵衛など江戸（東都）の四書肆及び河内屋喜兵衛など大坂（浪華）の三書肆から出版された。²⁹編者であり、嘉永七年十月に例言を記した川喜多真一郎（河喜多真彦、号・挙樹園、一八一八〜六八）は、京都生まれの国学者である。また、序を寄せる大倉法橋は、江戸時代後期から幕末にかけて京都で活躍した古筆鑑定家、大倉好斎かと思われる。本書の特色の一つとして、横小本でありながら一部を除いて絵師の略伝と使用印の双方を掲載している点を指摘することができる。³⁰すなわち、『新撰和漢書画一覽』をはじめ『本朝古今書画便覧』や本節でここまで検討を加えた各書では、絵師ごとに項目が立てられ、字号や画系、居住地などの小伝が記されるだけで、使用印が掲載されることはない。一方、享和二年（一七〇二）に刊行された『摺印補正』二冊やその欠を補うために文化七年に上梓された『摺印補遺』一冊のように、江戸時代後期になると横小本の印譜集も出版されているが、あくまでも使用印を掲載するのが主な目的で、絵師名に添えられるのは号や居住地などに限られている。本書ではその両者を一体化しているわけである。全三冊の上・中二冊を畫家之部にあてており、その内の中冊に次のように宗達や光琳及びそれに関わる絵師が掲載されている（図33）。

野村宗達（名ハ以悦伊年ト号ス別号ヲ對青軒ト云能登ノ人初メ徒テ加州金沢

二住ス後京師ニ来リ豊宗寺ニ寓ス狩野安信ヲ師トシテ後自ラ一家ヲ成ス殊花鳥設色ヲ善ス」／「對青軒」(朱文円印)〔中巻4才〕

尾形光琳(名ハ方祝字ハ道崇寂明ト号シ又青々堂長江軒等号ス平安ノ人初メ狩野常信ニ学シテ後自ラ一家ヲナス其法世ニ超越シテ大イニ称誉セラル又磊落ノ画ヲ作ルニ其風致甚奇ナリ享保元年四月六日歿ス年五十六)／「方祝」(朱文円印)、「伊亮」(朱文円印)、「潤声」(朱文円印)、「道崇」(朱文円印)、「青々」(朱文円印)、「光琳」(朱文円印)、「寂明」(朱文方印)、「寂明」(白文方印)、「道崇」(白文方印)、「方祝」(朱文方印)、「光琳」(白文長方印)、「潤声」(白文方印)、「法橋光琳」(白文長方印)、「法橋光琳」(緒方) (朱文方印)、「光琳」(白文方印)、「幕形花押」〔中巻4才〕6才

同乾山(光琳ノ弟ナリ名ハ深省画ヲ能ス陶工ニ妙ヲ得テ其名籍甚シ寛保三年六月二日歿ス年八十一)／乾山(袋形花押)〔中巻6ウ〕

何帛(光琳ノ門人ナリ名ハ太青何帛ト号ス)／太青、何帛〔中巻6ウ・7才〕

宗雪(姓氏詳ナラス後名ヲ改メテ相雪ト云光琳ノ風ヲ学ンテ逸氣アリ後又狩野某ト交友シテ其風ヲ変ス)〔中巻7ウ〕

渡邊始興(通称求馬平安ノ人初メ狩野風ヲ学ヒ後又光琳ヲ学フ終ニ一家ヲ成ス近世応挙吾人ヲ賞シテ能手トス宝暦五年七月廿九日歿ス年七十三)／「始興之印」(白文方印)〔中巻7ウ〕

中村芳中(平安ノ人浪花ニ住ス光琳ノ風ヲ慕ヒ修シテ其趣ヲ得タリ又俳諧ヲモナセリ)／芳中、「芳中」(朱文方印)〔中巻59ウ〕

抱一上人(名ハ文詮字ハ暉真鶯村ト号ス又雨華菴ト云光琳ノ画法ヲ慕ヒテ修シ大イニ其格ヲ得タリ時ニ称誉シ其名頗ル高ク画ヲ求ル甚夥シ文政十一年十一月廿九日歿ス年六十八実ハ某侯ノ公子ナリ因テ僧体トナリテ等覺院ト云)／抱一暉真誌、「文詮」(朱文小瓢形印)、「抱一」(朱文円印)、「文詮」

(朱文円印)、「抱式之印」(朱文方印)、「暉真」(朱文方印)、「輕拳道人」(朱文方印)、「等覺院印」(朱文方印)〔中巻66才〕67才

掲載されている順に宗達から検討していくと、まず宗達の姓を「野村」とする点は、『本朝古今書画便覧』に二人載せる内の最初に立項されている宗達の記載内容に近い。既に検討を加えたように、そこには「野村氏名ハ以悦号ハ伊年又劉青軒元能州ノ産加賀ニ住シ後京師豊宗寺ニ居ス法橋ニ叙ス画法一家ヲ成ス世二宗達流ト称ス」と記されており、姓だけではなく、名は「以悦」で号は「伊年」、能登の出身で加賀に住み、後に京都に出て豊宗寺に居住し、一家をなしたとする点で一致している。一方、『本朝古今書画便覧』が「劉青軒」と誤っていた号を正しく「對青軒」とし、法橋に叙されたという点を採用せず、狩野安信に学んだと画系について触れるとともに着色の花鳥図を得意にしていたと指摘している。今日の認識と異なる点もあるものの、『本朝古今書画便覧』を踏まえつつ修正を加え、画系や得意分野について独自の見解を記しているように見えるが、実は、叙述の都合で後述する『画乗要略』に近似する記述を見出すことができる。白井華陽によつて著され、本書に先立つ天保三年に刊行された『画乗要略』には宗達について、「野村宗達名ハ以悦號ニ伊年ト又號ニ劉青軒ト能登人初從居ニ加賀金澤ニ晩入レ京寓ニ居豊宗寺ニ師ニ狩野安信ト得ニ其法ト大變ニ其格ト花鳥用ニ没骨法ト余嘗觀ニ百花圖ト重重疊疊參差不亂曲盡ニ其狀ト」(上22才・23才)と記されているのである。この記述自体、『本朝古今書画便覧』を踏まえていることは明らかで、その上で狩野安信を師として花鳥画を得意にしたとしているのである。本書の記載が『画乗要略』を引用しているのは明らかであろう。では、『画乗要略』でも「劉青軒」と誤っているのを修正している点をどのように考えることができるだろうか。この点に関しては、本書に収録されている「對青軒」(朱文円印)が参考になる。例言には、「印章ハ大体原本を以て摸写なしぬれど或ハ遠郷の蔵幅或ハ石室の秘卷などハ傳写を請て舉たるありそハ他日原本を見む時を得て校すべし」とあり、実作品から摸写することを基本としたとされている。しかしながら、本書に掲載されている「對青軒」(朱文円印)の印影は『摺印補正』上冊(巻一)第八一丁裏(図34)に掲げられている印と極似するだけでなく、「印径二寸五分」「對青軒」と付記された印の大きさや印文の読みも一致する。従つて、本書の宗達の項に所載されている印影や附属する情報は『摺印補正』から引用された可能性が極めて高く、そこに示されている印文の読みに従つて「劉青軒」ではなく「對青軒」であると修正したと考えられる。

宗達の次には光琳が掲げられているが、宗達に学んだ、あるいは宗達の画風を慕ったなどとは記されていない。光琳の名が方祝であり、字は道崇、寂明、青々堂、長江軒などの号を用いた京都の人で、狩野常信に学んで一家をなし、享保元

年四月六日に五十六歳で没したと記しているが、どのような情報に基づいているのかやや複雑である。比較的類似点が多いのは、『本朝古今書画便覧』の「緒方宗謙ノ季子名ハ方祝通称雁金屋藤重郎江戸ニ住ス一名道崇又寂明潤声伊亮等ノ數号有享保元年四月六日ニ没ス五十二歳画ヲ狩野常信ニ学ヒ土佐家ヲ慕フテ新意ヲ出ス法橋ニ叙ス又漆器ヲ作り描金ヲ善シ茶事ヲ好ミ假山ヲ造ル風流ノ人ナリ」という記載であろう。しかし、号の一つが「寂明」であるとする点や師系、没年が一致するものの、「道崇」を名とする点はやや異なり、父・宗謙との関係や通称、江戸在住、潤声や伊亮の号を用い、土佐家にも学んで法橋に叙せられたという点は一致せず、享年も異なっている。使用した号に「青々堂」と「長江軒」があり、京都の人であるという点、さらには光琳の所為について「奇」であると評価する点は先に見た『新撰和漢書画一覽』と一致するが、同書では師を狩野安信であるとしている。従って、本書の光琳に関する記載は『本朝古今書画便覧』と『新撰和漢書画一覽』を参照して正しいと判断した情報を適宜組み合わせたものと考えられる。ただし、『本朝古今書画便覧』と異なる享年の根拠は明らかではない。²⁵²

では、光琳の項に所載されている款印についても先行書を引用しているのだろうか。宗達の項に載せられた「對青軒」（朱文円印）は『摺印補正』に収録されているものと同一であったが、「方祝」（朱文円印）、「道崇」（白文方印）、「方祝」（朱文方印）、「緒方」（朱文方印）、「光琳」（白文方印）、「伊亮」（朱文円印）の六顆も同じ印が『摺印補正』（図34）に収録されている。また、「潤声」（朱文円印）、「道崇」（朱文円印）、「青々」（朱文円印）、「光琳」（朱文円印）、「寂明」（朱文方印）、「寂明」（白文方印）、「光琳」（白文長方印）、「潤声」（白文方印）、「法橋光琳」（白文長方印）の九顆は『摺印補遺』（図35）に載る印と、最初の「潤声」（朱文円印）の読みを「潤聲」と記す点まで一致する。残る「法橋光琳」の落款と幕形花押も『茶人花押藪』⁽²⁵³⁾所載のものと極似しており、宗達の場合と同様、光琳の款印も先行書から引用されたと考えて良からう。

光琳に続いて掲載されているのが乾山である。いうまでもなく、「同」というのは光琳と同姓であることを意味している。光琳の弟で名は深省、絵画も堪能な陶工で、寛保三年六月二日に八十一歳で没したと記されている内、名と没年は『本朝古今書画便覧』⁽²⁵⁴⁾の記載と一致する。一方、乾山が光琳の弟で、絵画も巧みな陶工であったという点は『新撰和漢書画一覽』⁽²⁵⁵⁾と一致し、光琳の場合と同じく、乾山に関する本書の記載内容も『本朝古今書画便覧』と『新撰和漢書画一覽』から取捨選択されたものと考えられる。ただし、『本朝古今書画便覧』も「八十三歳」と誤っていた享年を正しく「八十一」としているが、何によったのかは不明であ

る。もちろん、既に見たように、文化十二年に刊行された『尾形流略印譜』には正しい享年が記載されている。しかしながら、ここまで検討してきたように、『尾形流略印譜』を参照した形跡は認められない。あるいは、後に検討するように、酒井抱一が編集して文政六年に跋を寄せている『乾山遺墨』によったのかもしれないが、本書に載せられている落款や花押を同書に見ることはできず、詳細は不明である。その「乾山」落款と袋形花押の内、花押については光琳と同じく『茶人花押藪』所載のものと類似しており、同書から引用された可能性が高い。しかし、同書にも落款は掲載されておらず、乾山が制作した陶磁器などから新たに採録したものかと思われる。

乾山に続いては「姓氏詳ナラス設色ノ画ヲ善セリ」とする友禅の項があり、その次が何昂である。既に指摘したように、⁽²⁵⁶⁾本書のように何昂を光琳の門人であるとする先行書に、加藤曳尾庵著『我衣』と中尾樗軒著『近世逸人畫史』がある。両書は刊行されていないが、抱一や谷文晁、菅原洞斎らが乾山の弟子であると位置づけるのとは異なっている。従って、本書の記載が直接曳尾庵や樗軒の書を参照したとまではいえないまでも、江戸時代中期以降の江戸において形成されていた同種の情報に基づいているとみなすことはできよう。また、「太青」と「何昂」の落款が収録されているが、管見の限り、先行する印譜類に一致するものを見出すことはできない。残されていた実作品から採録されたと考えられるが、何昂は江戸を中心に作画活動を行っており、京都の川喜多真一郎が何昂画を見る機会は極めて限られていたとみられる。何昂が光琳に師事したという情報とともに、本書の出版に関与した江戸の書肆からもたらされたのではないだろうか。

何昂の後、山口雪溪と狩野山トを挟んで宗雪の項を見ることができる。宗達と宗雪を明確に分ける点では『尾形流略印譜』に似るが、宗雪を宗達の後継者と位置づける同書と異なり、光琳の画風を学びその後は狩野派の絵師と交流して画風を変化させたとして評している。このような宗雪の捉え方と最も近いのは『画乗要略』であり、「宗雪ハ不審ニ其姓名ニ後改ム相雪ニ學ヒ光琳ニ有ニ逸氣ニ余觀ル其秋野鶉鳥圖ニ運筆設色似ニ其師ニ光琳歿後就ニ狩野某ニ請レ學ニ其家法ヲ示以己畫ニ某嘆賞曰如學ニ吾家法ニ反失ニ其奇格ニ竟不授レ法結爲レ友云」（上23ウ・24オ）と記している。両者を見比べてみると、姓が不詳で後に「相雪」と改めたとする点や光琳に学んで「逸氣」があるという点も一致し、『画乗要略』の記述をやや簡略にしたのが本書の記載であるとみなすことができよう。

宗雪の次には始興の項が立てられている。通称が求馬、京都の人で、狩野派を学んだ後に光琳を学び一家をなしたというのは『本朝古今書画便覧』⁽²⁵⁷⁾と一致する

が、円山應挙が始興を高く評価したという点と没年及び享年は同書に見えない。この内、応挙が始興を評価していたという点は『画乗要略』²³⁸に見ることができ、『本朝古今書画便覧』の内容を拡張した『画乗要略』を参照したと考えられる。なお、何によって始興の没年と享年を記したのかについては明らかにし得ない。²³⁹また、ここに掲載されている「始興之印」(白文方印)は始興の使用印として最もよく知られているもので、『尾形流略印譜』にも収録されているが、『摺印補正』にも載っており、他の絵師の例を考えると後者から引用した可能性が高い。

宗達から始興までは本書中巻第四丁表から第七丁裏に近接して掲載されているが、そこからやや離れた第五九丁裏に中村芳中が、そして第六六丁表・裏には抱一が載せられている。芳中から見えていくと、既に検討を加えたように、享和二年暮に江戸で出版された『光琳画譜』に加藤千蔭が寄せた序文に「なにはの芳中画をこのみて、光琳は筆のすさひをまなへり」と記され、川上太白による跋文にも「(前略)光琳氏か一風の洒落は画中の画にして(中略)其流をつたへたる難波人の(中略)又芳中たるものか」とあるように、「なにわ(難波)」の人で光琳画を学びその画風を伝えるものとして芳中は知られていた。しかし、ここまで検討を加えてきた一連の小型書画人名辞典に芳中の名を見いだすことはできない。²⁴⁰芳中が京都(平安)出身で大坂(浪花)に住み、光琳の画風を習得していて俳諧もよくしたという本書の記載に最も近いのは、「中村方中平安人住浪華法光琳得其趣」(下32才)と記す『画乗要略』であろう。宗達や宗雪でも『画乗要略』を参照しており、芳中についても同書によったとみなすことができよう。ただし、落款と印章も先行書によつてのかについては不明である。

抱一の項を見てみると、「文詮」を名、「暉真」を字としている点にはやや混乱が認められるが、本書以前に刊行された諸書に、名や号、光琳の画法を習得したことや没年月日、享年、使用印等をまとめて伝える書は稀である。『画乗要略』も、「抱一上人名暉信號二雨華菴法光琳雅趣不レ凡時工恐服」(下33ウ)と、名と号、光琳に法つて雅趣ある作品を描いたと記すにとどまる。しかも、寛政九年に得度した抱一が称した等寛院文詮暉真を『画乗要略』も「暉信」と誤記し名と誤っているのに対し、本書の表記自体に誤りはなく、没年月日や享年は正確である。京都在住であったとみられる川喜多と多少事情は異なるかもしれないが、江戸の町名主であった斎藤月岑(一八〇四〜七八)の編著で嘉永二年から三年(一八四九〜五〇)にかけて刊行された『武江年表』文政十一年の記事の中にも、「十一月廿一日等寛院抱一上人逝去あり(六十八齡と聞えし名輝真号文詮鶯邸雨華庵といふ尾形光琳の画風を慕給ひて一派を弘めたまへり)」と記されている。抱一

が没した日など誤りも含まれているが、没年月や享年、光琳との関係などは正確である。川喜多や斎藤月岑と抱一とでは一代ばかり離れてはいるものの、二人が生まれてから後に抱一は没しており、抱一に関してはそれだけ正確な情報入手しやすかったと考えておきたい。また、何帛の場合と同様、本書の出版に関わった江戸の書肆から抱一についての情報がもたらされたかもしれない。本書に収録されている抱一の款印も、新たに採録されたものであろう。

なお、本書の上巻第九四丁裏に抱一が「尾形流」の絵師に含めた野々村信武の名を見ることができ。しかし、狩野派の絵師の一人として位置づけられており、伝記等の記載はなく、収録されている印章は『摺印補正』に載るものと同一である。また、中巻第九丁表に立圃を、書家之部にあたる下巻第四八丁表から第四九丁表に光悦を載せるが、宗達等との関係について触れるところはない。

『万寶書画全書』(『書画必携』名家全書)七冊は、先述したように『鑒定便覧』の改題再編本とも言うべきものである。第四冊(巻三)と第五冊(巻四)を画家之部にあてる内、本稿に関わる人物としては、巻四の第七二丁表から第七六丁裏にかけて宗達、光琳、乾山、友禅、何帛、宗雪、始興、抱一の順に並べているのが目につく(図36)。「鑒定便覧」と比べた場合、掲載している人物や内容に大きな違いはないものの、伝記の一部を改変し使用印を追加するほか、全体にわたり配列を流派別に一層整理している。そのことは、宗達以下の配列にも当てはまる。光琳については狩野常信に学んだというだけで宗達学習に触れないのは『鑒定便覧』のままで、乾山では『鑒定便覧』になかった「画法家兄ニ似タリ」という記述を加えている。さらに、『鑒定便覧』では画系に全く触れなかった友禅について、「初光琳ヲ学ヒ後一格ヲナス」と光琳との関係を明示する。何帛についても「能其風ヲ得タリ」と光琳学習を強調し、宗雪についても『鑒定便覧』にあった「後又狩野某ト交友シテ其風ヲ変ス」という記述を削除して光琳学習に限定している。その後に光琳画風を慕ったとする始興と抱一を続けている訳で、光琳以降の配列に画系としてつながる絵師たちをここにまとめようとした意識が働いていると考えられる。もちろん、確実な絵画作品が知られていない友禅をここに加えていたり、光琳より前に活躍し宗達の後継者とみなされている宗雪が光琳を学んだと指摘するなど、今日の認識とも『尾形流略印譜』に示された抱一の認識とも異なる点も散見される。しかしながら、宗達に始まり光琳を経て抱一に至る画系を想定し、そこに乾山や何帛、始興、そして位置づけが異なるとはいえ宗雪を含めている点に、本書と『尾形流略印譜』との一定の類似性を見出すことはできよう。『尾形流略印譜』との直接的な関係は不明ながら、本節で検討

を加えてきた『鑒定便覧』までの各書に『尾形流略印譜』との類似点を見出せなかったことを考えると、この類似点は注目されて良い。

(四) 『皇朝名画拾彙』

『皇朝名画拾彙』の編著者である檜山坦齋（義慎）についてはこれまで何度も言及し、『皇朝名画拾彙』の記載内容についても引用してきた。谷文晁周辺の人物との関わりを中心にした坦齋についての考察はそれらに譲り、ここでは本稿に関連する人物の項目をまとめて示し、検討を加えることにしたい。

『皇朝名画拾彙』五巻五冊は幕府の儒官である林培斎（名は號、一七九三〜一八四六）による文政元年の序を伴い、翌文政二年に江戸の書肆・和泉屋庄次郎と松澤庄八から刊行された。²⁹⁴本書に光琳は収録されていないものの、巻之五を見ると、次のように光悦、光甫、宗達の項目が連続している。

本阿彌光悦號^シ大虚庵亦徳友齋^ト（寛永十四年二月三日没歳八十六）氣宇高尚
臨池之妙所^{ナリ}舉稱^{スル}一画又逸格然傳世甚^タ少嘗聞所^ノ畫三十六歌仙像至^テ今其
氏嫡家藏^ニ之（9オ・ウ）

本阿彌光甫（光悦孫^ノ光瑤子^ノ）號^ス空中齋^ト常嗜^ミ茶香^ヲ能製^ス陶器^ヲ學^ビ祖翁之
蹟^ヲ精^シ丹青之道^ニ然其^ノ画拂^レ地不^レ傳唯藤蓮丹楓三幅現^ニ存于其家^ニ（厥后於^テ
寫山樓^ニ得^レ見^ル其模本^ヲ一實足^ル稱^ニ逸作^ト縮圖出^ニ于画纂^ニ）（9ウ）

依屋宗達字^ハ伊年號^シ對青軒^ト叙^ス法橋^ニ寫山樓^ハ（谷氏）說^ニ賀州人^ノ野之村氏云
々始^メ師^シ永徳^ヲ後學^ニ本邦古画^ヲ別爲^ニ一家^ヲ（所^レ画最似^ニ光悦^ニ其師受^テ先後
未^レ得^レ詳^{ナル}矣）今傳^レ世者多是偽倣嘗見^ル源語關屋卷^ノ圖^ヲ有^ニ光廣卿題詠^ニ殊
爲^ニ真跡^ニ（10オ）

宗達について、谷文晁（寫山樓）の所説を引いて、加賀出身で姓氏は野々村、狩野永徳に学んで一家をなしたとし、前後関係は不明だとしながらも光悦と最も似ると指摘している。また、ここで宗達の真蹟とみなされている、源氏物語関屋の帖を描いた鳥丸光廣の賛を伴う作品とは、東京国立博物館に現在所蔵されている「関屋図屏風」六曲一隻であろう。²⁹⁵以上の記述の内、特に光悦との関係に言及している点が注目されることについては、これまでも指摘してきた。

その光悦について、号を挙げた後に没年月日と享年を示す。この内、号や没年

月日は正しいものの、享年は八十歳とするのが正しく、誤った理由は不明である。そして、書で名高く、絵画も「逸格」であるが伝わる作品が極めて少なく、子孫の家に三十六歌仙を描いたものが所蔵されていると聞いたことがあるという。光悦が書の名手であることは周知のことに属するが、確実な絵画作品は知られていない。光悦が出版に関わったとされてきたいわゆる嵯峨本の中に三十六歌仙があるが、明治二十二年（一八八九）に中野其明が出版した『尾形流百圖』の中にも光悦自画賛の三十六歌仙を模写したとするものが収録されている。両者の賛は類似するものの、前者の歌仙が上畳に座す姿で描かれているのに対し後者には上畳が描かれないなど絵像の方は一致しない。その内、後者には歌仙図を納める袋に抱一自身が書いた墨書が写されており、「三十六歌仙」という題に添えて「右ハ本阿弥次郎太郎所持之手鑑也以本阿弥栄次郎借寫者也」と書かれている。この墨書に従えば、抱一の時代には本阿弥家に光悦自筆の三十六歌仙図が伝えられていたことになる。当該作品を確認できない現在、光悦筆の当否や宗達画との関係について議論することはできないものの、江戸時代後期の江戸で光悦筆と信じられていた三十六歌仙図が存在したことは認められよう。

続く光甫について、光悦の孫で光瑤の子であり、空中齋と号して陶器を制作したと伝える。絵画も光悦に学んで巧みであったが伝わる作品は極めてまれで、子孫に伝わる「藤蓮丹楓三幅」が知られるのみであるという。光悦の描いた絵画作品が確認できない以上、光瑤が光悦に学んで描いたかを確かめる術はないが、ここにいう「藤蓮丹楓三幅」とは、抱一が模写したことが知られている「藤蓮楓図」三幅対（藤田美術館）であると考えられる。谷文晁が編集した『本朝画纂』に縮図が収録されているというのも記されているとおりである。²⁹⁶

本節の最初に述べたように、『皇朝名画拾彙』に光琳は収録されていない。しかしながら、光悦による画作を取り上げて宗達との関係に言及しており、『古画備考』やさらには明治版『尾形流略印譜』で光悦が「光悦流」や「尾形流」の祖に位置づけられることになる先蹤となつていといえよう。²⁹⁷

小 結

本稿において、前稿に引き続いて『尾形流略印譜』が刊行された文化十二年以降に編述された諸本について検討を加え、そこに示された光琳像（イメージ）や抱一が「尾形流」に含めた絵師に関する認識について考察を進めた。しかしながら、章の途中で与えられた紙数が尽きてしまった。本稿でも言及した『画乗要略』

をはじめ検討すべき文献が残されており、次稿の考察にゆだねることとしたい。

註

- (270) 「江戸時代における光琳像の変遷について(上)」同(中)」「同(下—一)」同(下—二)」同(下—三)」同(下—四)」同(下—五)」同(下—六)」同(下—七)」(『愛知教育大学研究報告』第50・52・54・58・61・63・64・66・67輯(芸術・保健体育・家政・技術科学編)二〇〇一—一八年。なお、本稿における章や註、表、図の番号は前稿を引き継いでいる。
- (271) 『増補和漢書画一覽』については、「文政二己卯年孟夏 聚文堂蔵版」という刊記を伴う国立国会図書館所蔵文政二年版による。なお、同書は翌年三月に尾州(名古屋)勝村屋東助、同・藤屋宗助、同・美濃屋市兵衛、濃州(關)紅屋伊兵衛から再版されている。
- (272) 『増補和漢書画一覽』第二丁裏を見ると、祇南海と伊孚九の間に『新撰和漢書画一覽』には見えない保國、蘿井女、元陳の項を挿入しているが、『新撰和漢書画一覽』では祇南海の後六行が空白になっていた部分を利用したものである。
- (273) 『続新撰和漢書画一覽』の表紙に貼られた題簽には「(續篇)書畫一覽」、内題には「(新續)和漢書畫一覽」と記されている『続新撰和漢書画一覽』については、「文政五年己五月/尾州(名古屋)美濃屋市兵衛、同・藤屋惣助、濃州(關)紅屋伊兵衛、同州(岐阜)藤屋久兵衛」という刊記を伴う京都大学附属図書館所蔵文政五年版による。
- (274) 『続新撰和漢書画一覽』の凡例を記した文隆園が、文政五年に本書を刊行したいずれの書肆に当たったのか、あるいは全く別の書肆なのかは不明である。
- (275) 『続新撰和漢書画一覽』の凡例の別の項目にも、「此篇二撰スル所モ、亦前編ノ例ヲ以テ類聚シ且遺漏ヲ補フヲ以テ事トスルガユヘニ、(中略)但前篇ノ志ヲ継テ後人ノ一覽ニ備ント欲ス」とある。
- (276) 『新增和漢書画集覽』については、「天保六年乙未正月新刻/華木館蔵」という刊記を伴う京都大学附属図書館所蔵天保六年版による。なお、同書は天保十年に増補改正したとする版が同じく華木館から刊行されている。
- (277) 『新增和漢書画集覽』が出版された天保六年に天明六年版『新撰和漢書画一覽』を増補した『増補書画一覽』(表紙の目次や凡例には『新撰和漢書画一覽』と記す)も刊行されている。天明六年版から増補した両書の内容を比べて

みると、人名や記載内容が一致する項目もあるが異なる項目も多い。現時点においては、先後関係も含めて両書の関係は不明とせざるを得ない。

(278) 『廣求大成和漢書画集覽』については、大阪府立中之島図書館所蔵本による。なお、表紙裏の見返しに「書畫集覽 東都書林 文溪堂梓」とあり、文溪堂・丁子屋平兵衛が本書出版の中心を担ったことは明らかである。

(279) 『(書画医家)鑒定便覽』三冊は、例言に「此書前編儒家の部あり次に國學哥人の部を刻せり今此編は画家書家また医家を附す」とあるように、内題に記されている『古今墨蹟鑒定便覽』の画家書家医家之部をなすもので、本稿では『近世人名録集成』第四卷(勉誠社、一九七六年)に影印されている国立国会図書館白井文庫所蔵本によった。なお、挿図には国文学研究資料館に所蔵される安政二年版を用いた。

(280) 元禄七年(二六九四)に初版が刊行されている『万寶全書』全十三巻十三冊に含まれている「本朝書印傳」三冊でも絵師の伝記に添えて使用印を掲載する項目も見られるが一部にとどまる。

(281) 『摺印補正』と『摺印補遺』については、註(270)前掲の拙稿(下—一)を参照されたい。なお、『摺印補正』の挿図には国文学研究資料館に所蔵される刊年不明版を、同じく『摺印補遺』は架蔵の文化七年版を用いた。

(282) 『本朝古今書画便覽』に記されている「享保元年四月六日ニ没ス五十二歳」という光琳の没年や享年は、既に指摘したように『続茶人花押藪』を踏まえたものだが、没年は正しいものの月日と享年は誤っている。また、享年を五十六歳とする『鑒定便覽』の記載も正しくなく、正確には正徳六年(享保元年)六月二日に五十九歳で光琳は没している。

(283) 註(270)前掲、拙稿(下—四)図16。

(284) 『本朝古今書画便覽』には、「乾山(緒方宗謙ノ仲子名ハ深省通名新三郎初メ京師ニ住ス後双岡住ス其時号シテ尚古又習静堂トモ紫翠壺海陶隱等ノ号アル晩年江戸ニ住シ寛保三年六月二日ニ没ス八十三歳嘗テ廣沢長好ニ因テ和歌ヲ学ヒ又茶法ヲ瑞流宗佐ニ学フ又画ヲ善ス好テ陶器ヲ製ス花様ヲ画キ讃詞ヲ加フ底面乾山ノ両字アリ又日本雍州乾山陶器省造ル之文字ヲ記ス世ニ乾山焼ト称ス)(56ウ)」とある。

(285) 『新撰和漢書画一覽』には、「乾山(尾形氏名ハ真省、光琳ノ弟也、洛西鳴瀧村ニ隠ル、画ヲヨクシ、又陶器ヲ作ル、自ラ陶隱ト号ス、世ニ乾山焼ト称シテ清玩トス)」とある。

(286) 註(270)前掲、拙稿(下—四)。

- (287) 『本朝古今書画便覧』には、「始興（渡邊氏名ハ一）通名ハ求馬初メ画ヲ狩野家ニ学ヒ後光琳ヲ師トス自ラ尚信ノ画風ヲ好ム京師ノ人一ツニ禁闕ノ士一ツニ近衛殿ノ臣ト子孫近頃迄アリ」(「82ウ」とある。
- (288) 『画乗要略』には「始興 渡邊始興通稱ハ求馬平安人初學ニ狩野氏ニ後參以ニ光琳ヲ洵ニ汰ニ家ニ自成一派ニ沖瀟潤澤檀ニ名於一時ニ余嘗觀ニ其山水ニ殆與ニ尚信ニ爭レ先又觀ニ墨梅墨松ニ深得ニ光琳筆意ニ應舉常稱レ之爲ニ能手ニ」(上24才)とある。
- (289) 小林忠氏は「渡辺始興試論」(『琳派絵画全集』光琳派二、日本経済新聞社、一九八〇年)において、『鑒定便覧』が伝える始興の没年月日が始興の菩提寺である西王子の過去帖に徴しても正しく、享年については異説もあるもののおそらく誤りないとされている。
- (290) 註(270)前掲、拙稿(下二)。
- (291) 『本朝古今書画便覧』を増補して文久二年(一八六二)春に刊行された『本朝古今新增書畫便覧』には芳中の項があり、「中村氏号ハ一京師人大坂ニ住ス光琳ノ風ヲ慕フテ其骨ヲ得タリ」とある。
- (292) 『万寶書画全書』(外題は『書画必携』名家全書)の成立には不明な点が多い。初印本かと思われる京都府立京都学・歴彩館所蔵本の刊記を見ると、須原屋茂兵衛をはじめとする江戸(東都)の書肆四軒、京都(皇都)の書肆として林芳兵衛と越後屋治兵衛、大坂(浪華)の書肆として河内屋藤兵衛と河内屋茂兵衛が名を連ねているが、末尾の河内屋茂兵衛にのみ住所が記されていることからこの書肆が出版の中心を担ったのかと思われる。書肆名の前には「嘉永五年子九月新梓」と刊年が示されているのだが、序文の末には「文久紀年西冬ノ六十八才ノ大倉法橋識」と記されており、例言の末尾にも「文久元年三月ノ清齋主人記」とある。文久元年(一八六一)は嘉永五年(一八五二)に遅れること九年であり、刊行された後に序や例言が記されたことになるので、実際は文久元年頃に出版された可能性が高い。なお、挿図には架蔵の刊年不明版を用いた。
- (293) 註(270)前掲の拙稿(下一七)において既に指摘したように、『古画備考』や明治版『尾形流略印譜』では光悦流や尾形流の絵師に友禪を含めている。そのことと、『万寶書画全書』における友禪の伝記記載や位置づけとの間に何らかの関係があるのか否かについては不明である。
- (294) 『皇朝名画拾彙』については、京都大学附属図書館に所蔵される文政二年版による。

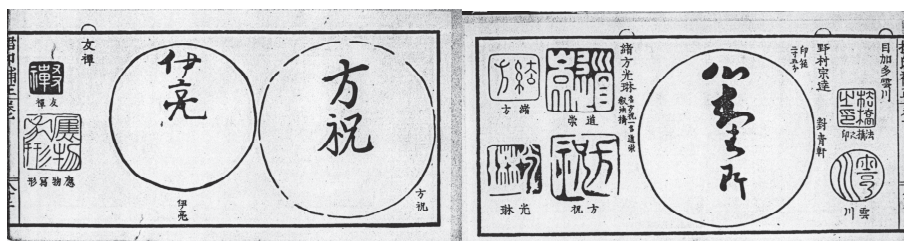


図 34 『摺印補正』(81ウ-82才) 国文学研究資料館

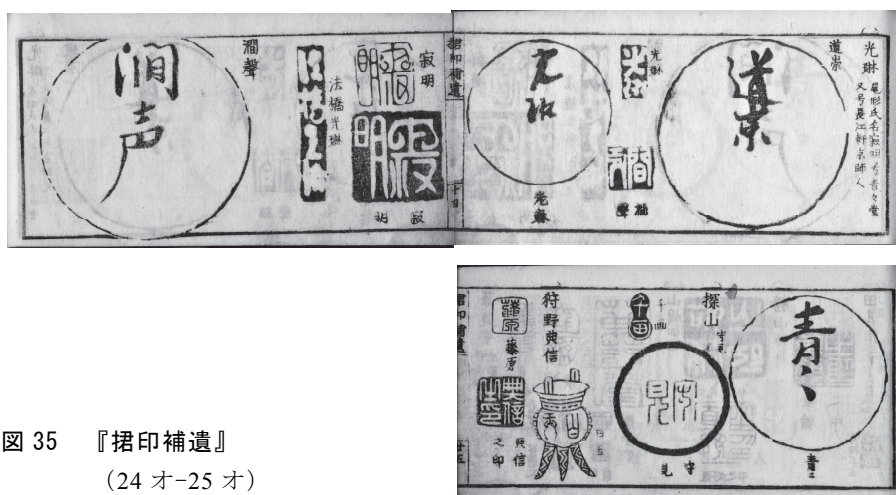


図 35 『摺印補遺』(24才-25才)

- (295) 「関屋図屏風」を納める箱には抱一の箱書きがあり、いずれの時点でも不明であるが、抱一もこの作品を目にしていたことは確実である。
- (296) 『本朝画纂』の近衛家熙に始まる一冊に、光悦に続いて光甫が収められている。そこには、「本阿彌光甫始稱ニ次郎三郎ノ光瑳男(光悦孫)號ニ空中齋ニ茶事ニ善ニ書畫ニ其筆蹟尤少」という記載とともに、落款・印章と光甫七代の子孫に伝来しているという「楓図」が掲載されている。
- (297) 『皇朝名画拾彙』には立圃の項目も見ることができ、絵画については「逸脱」の趣があると記すだけで、宗達等との関係についての指摘はない。

(二〇一八年九月二十五日受理)

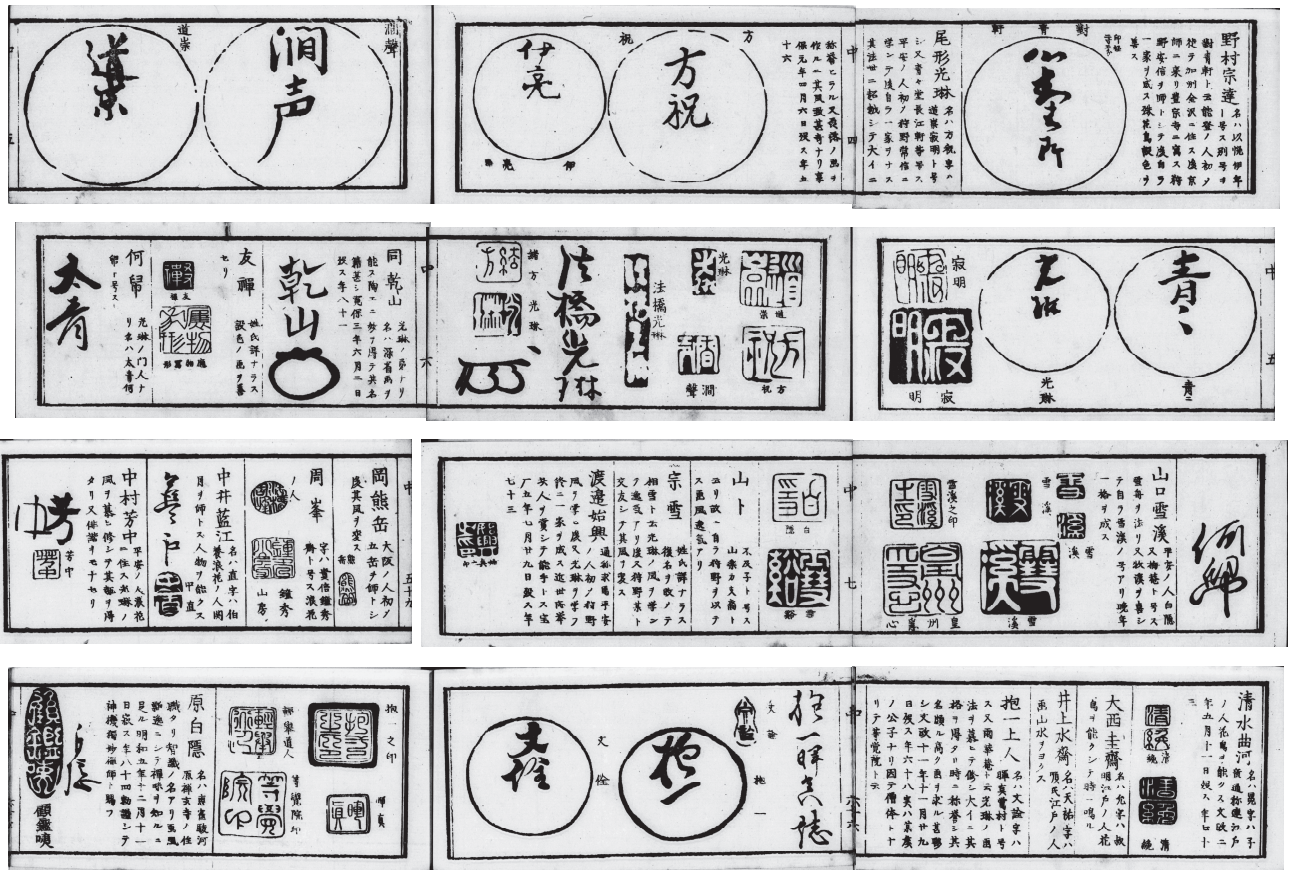


図 33 『〈書画医家〉鑑定便覧』中巻(4才-7ウ,59ウ,66才-67才) 国文学研究資料館

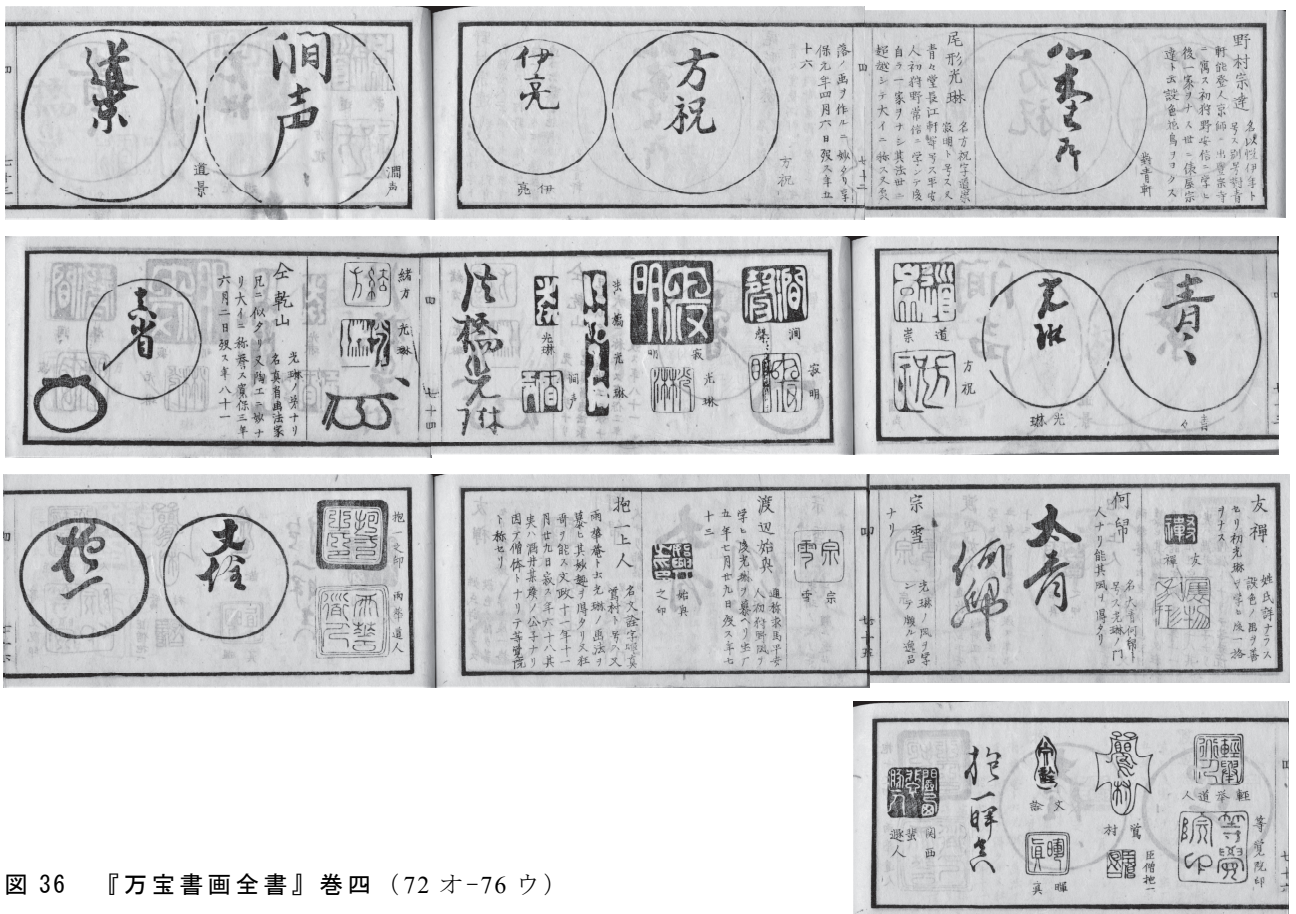


図 36 『万宝書画全書』巻四(72才-76ウ)